

ential game である。この場合のベース解から更に進んで non-truncated な場合についても詳しい説明がなされている。

最後の第12章 Comparison of Experiments では(3)で述べられている思想が簡略に説明されている。これもゲームの立場からいえば、統計家の今一つの strategy に注目していることになる。今まで fixed sample-size game でも sequential game でも豫め指定された確率変数による実験を考えたのであるが、如何なる確率変数による実験をするかの判断も統計家に許された strategy であることに注目する。そのためには、より多く情報の得られる実験を行うべきであり、その間の関係について論及されている。

以上のように統計推理の問題が、自然とのゲームにおける統計家の strategy の問題として論述され、而も良く成功していることは、統計學に新しい視野を與えるものとして興味深いものがある。ただ少し気になることは Ω の上の先驗的確率分布を積極的に是認するが如く、せざるが如く、それに對する立場が明瞭にされていないように思われる點である。minimax 原理との関係において今少しはっきりとして欲しかった。(宮澤光一)

モーリス・アレー

『純粹經濟學概論』

Maurice Allais, *Traité D' économie Pure*, la deuxième édition, Imprimerie Nationale, Paris, 1952 (5.000 frs.)

Maurice Allais といつても、我が國では御存知ない方が多いのではないだろうか。私が Allais の名前を聞いたのは、1952年マサチューセツ工科大学において、サミエルソン教授が彼の選擇理論のセミナーの席上、アレー教授に絶讃の辭を送った時であった。その時以來、フランスにアレーあり、という強い印象が私の腦裡を去らなかつたが、そのアレーから突然二、三の「非線型景氣論」に關する論文と共に、彼の名著「純粹經濟學概論」の第二版を受取り、その書評を日本の雑誌に行うよう依頼を受けた時には、少なからず驚喜した。驚いたのは、まず本書のボリュームである。騰寫刷とはいへ、ザラ紙大の5巻にぎつしりとタイプされて、本文852頁、附録68頁の大冊である。勿論フランス語であるから、義理にもこれを讀み通したとはいへない。しかし何とかアレーの期待に答えようと思つて、二三の雑誌の書評を見て驚嘆した。例えば、*Revue d'Économie Politique*「本書こそ

は、Pareto の *Manuel* や Walras の *Éléments* 以外には、以前に並べるべき例のない著作である」と稱讚し、「アレーの名は、Cournot, Walras と共に、フランスの數理經濟學史に残るであろう」と斷言している。*Economica* も *The Economic Journal* も、その正確にして、明瞭なる表現が、純粹經濟學の困難な問題の解明に的確に活用されていることに讚辭を送り、永く經濟理論の研究者に愛讀されるであろうと豫言しているほどである。フランスの内外において、これほどの賞讚をうけた書物であれば、學界の評價はもはや確定したものといつてよい。従つてこの書評では、ただ讀者の讀書欲をあふりたてればそれでよいであろう。

本書は、1943年に出版されたアレーの「純粹經濟學—經濟學的訓練の研究—」の第2版である。この書物は、純粹經濟學の研究者と學生の双方を相手として書かれているが、その目的とするところは、物理學においては既に永く用いられて來た説明方法を採用することによって、純粹經濟學の諸問題相互間の連絡を明らかにし、それらを総合的に説明することであるという。これが、有效かつ的確な説明方法であることはいうまでもないが、アレーは更に、各種の經濟問題の研究における出發點となるべき純粹經濟學の問題も、そのような方法によって初めて確定するのであると述べる。私が、本書の初め數百頁をさつと一讀した印象からいへば、本書はヒックスの *Value and Capital* とサミエルソンの *Foundation* を綜合した方法によって、不完全競争の諸問題と古典的問題(地代・利子・勞賃の決定というが如き)を含めた一般均衡を分析したという感じである。

本書は5部に分けられている。第1部は、純粹經濟學の基本前提の考察にあてられる。そこで、財と用役、個人の嗜好、生産技術、數量の測定法、というような所謂「與件」について、詳細な分析が加えられていることは、著者の意圖するところが、「純粹經濟學」の根本的研究であることを想察せしめるであろう。例えば、序論の表題が、「經濟學の混亂狀態」というのであり、その各節が、1. 經濟問題の存在、2. 經濟理論の不充分、3. Political Economy の不充分、4. 文章主義のイリュージョン、5. 目的と手段の混同、6. 經濟學の徹底的研究の必要性、7. 經濟學教育の必要性(以下略)というのを見れば、アレーの書物が、いかに經濟學の徹底的研究を意圖しているかは、想像出来るであろう。

この書評の讀者は、そのような名著が何故に騰寫刷で出されているかと疑問に思われるに相違ない。しかしそれには、記念すべき特殊の事情があつた。アレーが第2版への序で述べるところによれば、本書の初版は、1943

年實にフランスがドイツによって占領されている時に出されたのである。「フランスは、史上稀に見る困難な時期にあった。印刷は思いもかけず、數學的方法を用いることにさえ、強い反感が存在した」とは、アレーがフランスについて述べた言葉であるが、戦時中及び戦後の我が學界を三思せしめるではないか。しかも第2版を出すことすら困難を極めるという今日のフランスが、この名著を生んだことは、もって他山の石とすべきであろう。

第2部は、「Dynamics of Disequilibrium」と題され、消費者と企來の活動と、經濟システムの一般的發展を分析する。第3部は、「Dynamics of Equilibrium」と題され、一般均衡理論の説明と、社會的能率の分析(厚生經濟學の諸問題の考察)にあてられている。第4部は、特に地代と勞賃の決定に関連せる諸問題を考察する。そして第5部では、若干の數學註と索引が與えられている。

本書は、サミエルソンの Foundation 程度の數學を用いているけれども、ヒックスの Value and Capital 以上に説明が丹念であり、また多くの圖表があるから、たとえ數學的知識が不充分であっても、經濟學の基礎訓練を身につけた人には、充分理解出来るであろう。以下アレーの自から記するところによって、本書のオリジナルな貢獻と思われる點を列記しよう。

I 消費者の理論 1. cardinal utility の定義と性質(アレーは、cardinal utility を心理學的基礎の上に定義することが可能であるという立場をとる。) 2. 消費財の分類(消費財の商品群別を行い得る條件を研究し、Aggregation の問題に接近する。) 3. 勞働の供給曲線の分析 4. 勞働の不效用と貨幣の限界效用の分析。

II 生産の理論 1. 生産函數の性質(函數の同次性、準同次性、その基本性質等を詳細に研究し、更に生産函數の reducibility を研究して、convexity の假定が一般には承認出来ないことを主張する。また同質部門と異質部門の區別を考え、厚生經濟學の問題に極めてユニークな分析を加える。) 2. 厚生函數と平均費用との關係(この重要な問題の分析は、アレーが初めて分析した。) 3. 産業の均衡條件(總生産 la production globale と販賣價格との間には、何ら直接の關係なきことを指摘し、かつ全體としての均衡條件が準同次性をもつことを明らかにする。) 4. 勞働需要の獨占の分析、5. 均衡點にあらざる現實の企業活動の分析 6. arbitrage の一般的條件の分析(一般均衡の成立とその安定條件の分析に利用する。) 7. benefit 及び利潤という概念の分析、8. 生産における生産用役の効率及び單位資本の効率の分析

III 獨立・補完・代替 1. 效用曲線による財の分類(これはミルトン・フリードマンの分類にかえることで

あるが、彼のとも異っている。) 2. 連關財の新しい定義(直接無差別面の性質から、新しい定義をあたえ、スルツキー方程式を解釋する。) 3. 生産における同じ定義 4. 獨立財の需給の分析 5. 消費者における代替財と補完財の需給、6. 企業における代替財・補完財の需給

IV 經濟量の測定(ここでは經濟學が取扱う各種の數量を measurable なものとするため、最も根本的な研究が行われている。他に例のないオリジナリティをもった部分である。)

V 均衡の安定性 1. 均衡の近傍とある運動の近傍における攪亂の法則の應用、數量に関する安定性と價格に関する安定性の區別、假想的變動と豫想される變動と現實の變動の區別(これらはいずれも、經濟動學の基本概念を明瞭にしようというのである。) 2. 個人の均衡の安定性の解釋 3. 企業均衡の安定性の解釋(いくつかの新しい解釋が與えられている。) 4. ワルラス的一般均衡體系の安定性の證明(サミエルソンの安定條件と類似する。そして更に園博士の議論と極めて類似した議論を展開している。) 5. 假想的經濟發展のメカニズムと完全豫想の條件を満足している經濟システムにおける利子率の決定(これはヴァイクセル・ミルダール・リンダール以來最も問題の多い議論の詳細なる分析である。)

VI 一般均衡論 1. 一般均衡方程式(一般均衡を through time で考えて、それを明瞭に方程式化している最初の試みであり、利子率は陰伏的にしか導入されない。) 2. 因果性と函數關係(多くの經濟學者の混亂を批判し、二種類の相互依存關係即ち函數的依存關係と因果的依存關係について、明瞭なる區別と關係を指摘する。) 3. 個人的價值と社會的價值 4. 勞働價值('laborité')(ここにいう laborité とは、ある商品の生産に直接間接必要な勞働量であるが、アレーは、この概念は、我々の直觀の要求にかなうと共に、いろいろの推論をかなり簡単にすることに役立つと述べている。) 5. 慢性的失業の分析

VII 厚生經濟學の理論(パレート・パローネの傳統に立ちつつ、最近の英米における議論と多くの點で共通した、しかしいくつかの點で一段と優れた議論を展開している。) なお他にも擧げるべき點が多いが、與えられた紙數はすでに超過した。

以上の紹介から既に明らかなように、本書はヒックスの Value and Capital と共に、今後經濟理論を研究しようとする者の必讀の書となるであろう。1940年代の書物の中で、經濟學史の中に残る1つの書物は、正にこの書物であると斷定するも殆ど誇張ではないであろう。

外國の文獻の吸収に卓抜した才能を示す日本の學者の前に、今や新しい攻撃目標が提出されたものといわなければならぬ。(市村眞一)

ブリューミン

『現代英國ブルジョア經濟學批判』

И. Г. Блюмин, Критика Современной Буржуазной Политической Экономии Англии. Москва 1953, pp. 359.

マルクスとエンゲルスが當時のブルジョア經濟學——古典派經濟學——の批判に非常な努力を拂ったことは周知の事實であるが、彼らは、1870年代のはじめに擡頭して、その後のブルジョア經濟學の發展に決定的な影響を及ぼした效用學派については、2, 3の挿話的な言及をしただけで、詳しい批判をくわえなかった。したがって、マルクス主義的立場から近代主觀學派の經濟學に批判的検討をくわえるという仕事は、後代のマルクス經濟學者の課題として残されたのであるが、今日にいたるまで、この課題は十分には果されていないといってもおそらく誤りではないであろう。もちろん、ブハーリンの『金利生活者の經濟學』やヒルファードィングの一連の勞作のことはいまさらいわないとしても、その後のソヴェトや英米のマルクス經濟學者によって、この分野の研究がすすめられなかったわけではないが¹⁾、たとえば、古典學派にたいするマルクスの『餘剩價値學說史』に量質ともに匹敵するような勞作はまだ現われていない。ところで、今日、世界で最大最高のマルクス主義經濟學者スタッフを擁しているのは、おそらくソヴェト同盟であるとすれば、このような勞作の出現をまず第1にソヴェトの經濟學界に期待するのは當然のことであろう。事實、ソヴェトの經濟學者自身が意識的にこのような課題を自らに課していることは、つぎのような言葉によっても察知できる(これは「ソヴェト經濟科學の任務」について論じた雑誌『コムニスト』の巻頭言の言葉である)。

「帝國主義反動の辯護論者、擁護者たちは、運命がつきて死滅しつつある資本主義を救う方法を、百方手をつくしてさがしとめている。資本主義諸國の出版界は、いろいろな方法でブルジョア秩序を讚美し美化する……文獻で充滿している。先進的經濟科學の代表者であるソ

ヴェトの經濟學者には、反勤勞者的なこれらの思想や見解を系統的に假借なく曝露するという責任ある任務が課せられている²⁾。」と。

ここにとりあげたイ・ゲ・ブリューミンの勞作『現代英國ブルジョア經濟學批判』は、ソヴェトの經濟學者が近代經濟學の批判という課題を眞正面からとりあげたまとまった勞作として、他にあまり例のないものである(もちろん、このような問題にかんする小冊子は他にもあるし、雑誌『經濟學の諸問題』はほとんど毎年數回は近代經濟學批判の論文を掲載している)。いままでのところブリューミンの書物については、『經濟學の諸問題』(1954年第7號)に簡単な内容紹介がある以外、ソヴェト國內での書評はまだ現われていないから、本書が彼の以前の多くの勞作のように、國內で厳しい批判をうけるか、それとも高く評價されるかはまだわからない。また、本書が(近く邦譯が刊行されるようであるが)日本の讀者にどのように受けられるか、本質的な點をついたすぐれた近代經濟學批判の書と評價されるか、過度に超越的な皮相な批判とみなされるかは、おそらく讀者の立場によっても異なるであろう。

著者ブリューミンについては、ソヴェトの他の經濟學者の場合とおなじく、くわしい生いたちや經歷はしられていない。彼はかつてクルノーの『富の理論』を露譯して、競争条件のもとでは勞働價値説が妥當するが、獨占の存在する場合にはクルノーの理論が妥當すると主張して、痛烈な批判をうけたことがある³⁾。彼はまた1930年代のはじめに『經濟學における主觀學派』という大著をかいたが、その第2卷「數理學派」⁴⁾をみると、クルノー、ドミトリエフ、ゴッセン、ジェヴォンズ、ワルラス、カッセル、パレートの理論を、詳細に數式や圖表を引用して祖述したもので、ほとんど一般の數理經濟學概説書と大差ないような觀を呈している。もっとも、同書において、彼は「數のフェティシズム」におちいる危険を指摘しているけれども、大たいにおいて、近代經濟學者の發展させた數學的分析方法をマルクス經濟學に「攝取」という立場をとっていたようにみうけられる。また、戦後においてもブリューミンは1948年にケインズの『一般理論』のロシア語譯が出版されたとき⁵⁾、

2) “Коммунист” No. 22, 1952, стр. 10.

3) 『コムアカデミー通報』第20號。ブリューミンは『資本主義的企業結合論』(1934年)において、この見解を改めた。

4) И. Г. Блюмин, Субъективная Школа в Политической Экономии, Том II, Математическая Школа, 1931.

5) Дж. М. Кейнс, Общая Теория Занятости, Про-

1) Cf. N. Bukharin, *Die Politische Oekonomie der Rentners*, 1926. R. Hilferding, *Böhm-Bawerks Marx-Kritik*, 1904. N. Bukharin, *Eine Oekonomie ohne Wert* (“Neue Zeit” 1913/14 B. I).